

母乳育児継続と母乳外来のケア、実母の母乳育児観との関係

著者	栗野 雅代, 関塚 真美, 島田 啓子, 坂井 明美
雑誌名	日本助産学会誌 = Journal of Japan Academy of Midwifery
巻	16
号	3
ページ	172-173
発行年	2003-01-01
URL	http://hdl.handle.net/2297/34912

doi: 10.3418/jjam.16.3_168

46 母乳育児継続と母乳外来のケア、実母の母乳育児観との関係

杉浦クリニック ○栗野 雅代
金沢大学医学部保健学科 関塚 真美 島田 啓子
坂井 明美

I. 緒言

近年多くの産科施設で母乳栄養確立のための様々な試みがなされており、退院後の援助の充実を目指して母乳外来を設置する施設も増加している。しかし1ヶ月時の母乳栄養率は平均40~45%に低下しているのが現状である。岩井ら¹⁾は産後1ヶ月の混合栄養への移行は実母の母乳育児観に影響されると報告し、藤井ら²⁾は退院後も母乳外来における専門的なケアの実施が母乳育児の継続に効果的であると述べている。そこで本研究では1ヶ月時点での母乳栄養継続と母乳外来のケア、実母の母乳育児観との関係を明らかにすることを目的とした。

II. 方法

1.研究期間並びに対象:2002年6月~7月に石川県内の産科施設5か所で出産し、正常な産褥経過をとった褥婦132名とその実母122名に研究の目的と結果の公表について同意を得、個人並びに施設の特定がされないように配慮した。

2.研究方法:褥婦には1ヶ月健診時に、質問紙調査を実施した。実母には褥婦の了解を得た後に、郵送調査を実施した。調査項目は褥婦に対しては、出産前の母乳育児の意志、母子同室の有無、退院時と1ヶ月健診時の栄養方法、混合または人工栄養に移行した理由、出産施設の母乳外来の有無を、実母には過去に行った栄養方法、母乳育児観などについて尋ねた。分析には統計ソフトSPSS.ver11.0を用い χ^2 検定、t検定、ANOVAを行った。

III. 結果

1.対象者の背景:初産婦66名、経産婦66名、褥婦の平均年齢 29.4 ± 4.0 歳(20-41)、実母の平均年齢 55.3 ± 4.8 歳(41-70)、実母の出産年代は1970年代が75.6%、実母の過去の栄養方法は23.0%が母乳、41.8%が混合、35.2%が人工栄養であった。

2.退院後に母乳外来を受診した者の81.1%は1ヶ月時で母乳栄養を実施しており、母乳外来を受診しない者の母乳栄養率は53.4%であった。さらに、母乳外来の開設状況(開設日数、専任ケア担当者、主たる施術方法の違い)によって5施設を3群に分類し比較すると出産前の母乳栄養希望率や退院時母乳栄養率については差がないが、1ヶ月時の母乳栄養率はA群が他の2群に比べ有意に高かった(表1)($p < 0.05$)

表1：母乳外来の開設状況

群	A (n=68)	B (n=23)	C, D, E (n=41)
母乳外来の有無	有り	有り	なし
実施者	専任の助産師2名	専任の助産師1名	不特定
開設日数	終日	週に1日	—
内容	・母乳栄養確立と継続のための援助 ・児の成長発達のチェック ・母乳育児、育児全般の不安の軽減 ・乳房トラブル時の対処	・母乳栄養確立と継続のための援助 ・児の成長発達のチェック ・母乳育児、育児全般の不安の軽減 ・乳房トラブル時の対処	・乳房トラブル時に対処
施術方法	桶谷式	SMC式	施術者によって異なる
母乳外来受診の適用	・初産婦は原則として全員 ・母乳育児に不安がない経産婦以外は全員に助産師から受診を薦めている ・乳房トラブルがある時 ・母乳育児期間中に不安がある時	・母乳確立ができていない者 ・乳房トラブルがある時 ・母乳育児期間中に不安がある時	・乳房トラブルがある時
母乳外来受診率	61.8%	13.0%	—
出産前母乳栄養希望率	95.6%	87.0%	85.4%
退院時母乳栄養率	94.1%	73.9%	80.5%
1ヶ月時母乳栄養率*	80.9%	43.5%	43.9%

* 群間による有意差あり (p<0.05)

- 入院中母子同室をしていた褥婦の84.8%は1ヶ月時で母乳栄養をおこなっており、母子別室であった者の母乳栄養率は45.8%であった。
- 実母の母乳育児観について、肯定的な感情を持っている者はA群、B群およびC、D、E群それぞれ86.2%、87.0%、87.8%であり施設別による違いはなかった。
- 褥婦の1ヶ月時の栄養方法は実母の過去の栄養方法の種類により違いはなかった。
- 退院時母乳栄養であったのに1ヶ月時で混合、人工栄養になった理由は「母乳不足感」によるものが68.1%で、「周囲の勧めで」と答えた者は0.8%にすぎなかった。

IV. 考察

退院時に母乳栄養であった者のうち、1ヶ月時で混合、人工栄養になった理由に「母乳不足感」が68.1%を占めたことや、褥婦の栄養方法は実母の母乳育児観の影響を受けていないことなどが明らかとなった。また母乳外来受診者のうちケア内容は项目的には類似していたが、外来の開設回数が多いA群で受診率、母乳栄養率が高かったことは、助産師の母乳外来への勧めやケア内容および関わり方³⁾などの違いとも考えられ今後の検討課題である。

今回の結果から、1ヶ月時の母乳育児の継続には実母の影響より、むしろ母乳外来で継続されるケアが母乳不足感および母乳育児に対する不安を減少させる可能性を示唆し、母乳育児の継続のために重要であると推察された。

V. 文献

- 岩井弥生 他：実母の母乳育児意識と褥婦の混合栄養育児移行との関係、助産婦雑誌 Vol,55, No,6, p72, 2001.
- 藤井克子 他：母乳哺育継続のための母乳外来の役割、第30回母性看護、p77, 1999.
- 野口真弓：母親の気持ちを支える母乳ケア、日本助産学会誌 Vol,13, No,1, p13-21, 1999.